田中　伸著

仮名草子の研究

謹　呈

著　者

略歴　田中伸（たなかしん）

大正9年8月　北海道生。
昭和17年9月　二松学舎専門学校卒業。
昭和21年9月　早稲田大学文学部卒業。
昭和24年3月　同大学院修了。
二松学舎大学教授，武蔵野女子大学講師，国学院大学講師。
著書「庶民の文化—江戸文化と歴史への道標」（昭42.7）富士書院。
「近世文学資料類従・10・二人比丘尼・七人比丘尼他」（昭48.6）勉誠社。
「可笑記大成」共編著（昭49.3）笠間書院。他。

仮名草子の研究

昭和四十九年六月十日　初版印刷
昭和四十九年六月十五日　初版発行

定価六八〇〇円

著者　田中伸
発行者　及川篤二
印刷所　セイユウ印刷

東京都千代田区猿楽町二—八—一三
（株）桜楓社
（電話）（〇三）二九一—五六六一
（振替）東京一八〇二〇

3093—710631—0723

仮名草子の研究

目次

第一部　仮名草子研究序説
一、仮名草子の複合性と系列立てへの試論……七
二、仮名草子の方法の混淆……二六
三、仮名草子形成の地盤……五一
第二部　作品研究
一、「うらみのすけ」の発想をめぐって……七五
二、「可笑記」の研究……九八
作者如儡子について……九八
最上家改易と「可笑記」……一二八
如儡子の別号について……一四五
三、「二人比丘尼」の研究……一五八
「二人比丘尼」の周辺……一五八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「二人比丘尼」の原型……一八六
〔補説〕「幻中草打画」と「二人比丘尼」……二三三
「二人比丘尼」の諸本……二三七
四、「浮雲物語」覚書……二四六

第三部　資料翻刻

凡　例……二七三
一、「須田弥兵衛妻出家絵詞」（写本絵巻）……二七五
二、「須田弥兵衛妻物語」（写本）……二八三
三、「浮雲物語」（寛文元年板）……三〇二
あとがき……三八五
索　引……三八九

第一部　仮名草子研究序説

一、仮名草子の複合性と系列立てへの試論

一

「仮名草子」とは近世初期の雑然たる一連の散文文学の名称として用いられているものである。それは誠に「雑然たる」という言葉でまとめるより外に仕方のない性格が、仮名草子の特質の一つであるかの如くである。

日本古典文学大系「仮名草子集」の第一に置かれているのは、『犬枕』という作品である。後期江戸文学の世界では、極めて大衆的な言語遊戯として片付けられて、冠句付、折句などと同一視されている「物は付」の書物である。恐らくは――浅学の私には、はっきりとは判らないが――当時の有閑人の遊びの一種であり、家康に仕えたことのある秦宗巴（一五五〇―一六〇七）をとりまく有識人たちのつれづれの興に生れた「物は尽し」の短文の集である。「枕草子」の「物は尽し」にならったものであることは、言を俟たない。『犬枕』とは卑俗化された『枕草子』という気持で題せられたという。何も、私はそれだからと云って、始めて仮名草子を繙く学生たちの尻馬に乗って、「その文学的意義は？」などと、開き直る気なのでは決してない。又、「新猿楽記」や「堤中納言物語」の「よしなしごと」などを引き合いに出し、更には「梁塵秘抄」中の春十四首や雑八十六首、「宴曲集」「閑吟集」等々を引用して、その史的展開を考え、その文学的意義の解明につとめる気などは、更々もたないのである。しかし『犬

枕』は、一応仮名草子の範疇に置かれていることは事実なのである。

それが『夫婦宗論物語』となると、一遍上人か、日蓮上人の法談の如き前置きから、念仏信者の亭主と法華信者の女房との、夫婦喧嘩まがいの教義問答が展開されるに至っている。勿論、これは『清水物語』（意林庵）や、『祇園物語』（清水寺執行）などの一連の啓蒙的な教義問答書の類である。しかしその目的意識からすれば、鈴木正三の『盲安杖』や『万民徳用』などや、浅井了意の『勧信念仏集』などと、一体どこで区別すべきであるか、極めて曖昧である。

これとは反対に『恨の介』や『浮世物語』などを対象とする時には、決して以上のようなとまどいは感じないのである。それは、それらの作品の中に明瞭に作者の文学形象化の跡を読みとることが出来るからである。それらは明らかに文学としての発言権を持っているのである。

この相違を我々はどう始末したらよいのであろうか。野田寿雄氏は『清水物語』と『神道物語』とを比較して、

次にどう見ても文学には縁の遠い専門的な実用書は、やはり除外すべきであろう。たとえば『神道物語』のようなものは、物語とあっても内容は神道の解説に過ぎないのであるから、文学とは言いがたい。しかし、『清水物語』のようなものは、内容は儒教の解説ではあっても、人物の問答という小説的プロットを持っているのであるから、厳密には小説とは言いがたいものの、やはり仮名草子に入れてよいであろう

と、述べておられる。(注1) すなわち個々の文芸性の探求によって、それぞれの位置を定めようという姿勢を示しておられるのである。従って、

要は胎動期混乱期にはいろいろな現象があって、それが次第に一つに形成されて行く傾向を持つのであるから、そこに細心の注意を払いつつ、採るべきものは採り、採り得ざるものは捨てるという覚悟を持たない限り、仮

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

名草子の扱い方は非常に困難である。

と、[注2]今後に重要な課題としてこの範疇決定の問題を提示しておられるのである。

この問題に対し、頴原退蔵氏は、その不明確な性格を個々の要素からの考察を加えて後、

仮名草子と呼んだ時には、通俗卑近を意味することはいうまでもなく、なおその上に実用的教訓的内容を予想すべき概念が含まれている場合が多かった。

と結論しておられる。[注3]この立場をほぼ継承されたのが暉峻康隆氏で、当時の仮名草子の概念の実体を踏まえて、

今また我々もこの時期の多少とも文芸性を有する作品を、仮名草子という学術用語をもって称することに不都合を感じないのである。

と規定しておられる。[注4]中村幸彦氏もほぼ同じ立場で

狭義の仮名草子性をきびしく吟味して一線を引き、その枠内でのみ、小説史を論じようとするよりは、むしろ中間的なものの存在を認めつつ、歴史を構成してゆく方が、この場合実情に即した歴史研究の態度であろう。

と述べておられるのである。[注5]勿論、仮名草子を狭義の文学性の中に考えようという意見も見られるのであるが、以上の諸先生の御意見は、今日の仮名草子に対する最も一般化した意見と見るべきであろう。それは、多少表現上の違いはあっても、結局は仮名草子の中に、少しでも文学的要素を含む仮名散文の書も、純然たる文学作品も包括して考えて行こうという態度を持しておられるものの如くである。

「仮名草子」という名称そのもの、含み得る内容が、それだけ広範に亘るため、「近世初期小説」とか、「近世啓蒙期の随筆」とかの名称とは違って、これを学術用語として定着せしめるためには、そうした性格規定の曖昧さの残るのは仕方ないとしなければなるまい。しかしながら、野田氏の、「文学であるものとそうでないものとを区

別するために、個々の作品を詳しく見て行こう」とする態度に類する問題は、常に残されて行くことも否定できないのである。のみならず少くとも概念規定において、こうした曖昧さを残したままで前進する以上、その研究過程において、その曖昧さを払拭する意図を示すのが当然であり、その意図の提示なくては、概念規定は単なる形式であり、逃げ口上から一歩も出ていないことになるのである。すなわち、そうした曖昧さの概念の上に立つことは、理論は仮定の上に組立てられるものの如くであり、決して曖昧さは少しも払拭されないのであり、問題は永久に遺されて行くのである。その脱出口を西鶴への昇華とか、浮世草子への過渡性ということによって、許容して行く限り、仮名草子の独自性は失われ、それは浮世草子解明のための前提にすぎなくなるであろう。

例えば『清水物語』を対象として、その対話形式をとることに文学性を認めるとしよう。しからば、対話形式を選択したということと、三教一致を説こうとする意図とは別次元のものとして考えて行こうというのであろうか。また、対話形式が当時如何なる意味において文学的だと断定し得るのかは、明瞭ではない。中世における対話的形式や、問答体は評論の一方法であった。歌論、連歌論、能楽論の多くはこの方法をとっている。鏡物のように特定の場の設定はすでに「無名草子」に見られる。しかし、これはすべて、文学評論書の枠の中で、その形式が文学として生かされている。こうした中世の問答体を前提としても、こうした啓蒙文学としての位置を充分に確定づけることは困難である。

こうした個々の作品における多くの問題点を解決する方法として、外側からの枠付けが考えられた。それは分類という形である。先の頴原氏が「仮名草子各説」として

一、啓蒙的なもの　二、教化的なもの　三、娯楽的なもの

の三系列に分けられ、暉峻氏が

一、娯楽的ジャンル　二、下降的ジャンル　三、上昇的ジャンル

とされ、いずれも仮名草子の創作意図の思想的見地に立って柔軟性のある系列を考えておられるのである。これらは必ずしも決定的とは云えないにしても、それぞれの文学的意義にのみ終始して、近世初期文学の中に芽生えている新時代的性格や、近世的な要素を置き忘れるような結果にならぬための配慮がうかがえるのである。しかしながら、その結果は、曖昧さを整理することにはならず、仮名草子の概念の明確化を望むまでには到っていないのである。すなわち、それぞれの系列に示めされた仮名草子の性格を規定付けるのに重要であり、その近世的意義を認めるとしても、それぞれに属する個々の作品の持つ文学的意義を十分に生かし切るには到っていないのである。敢て云うなれば、「—的」という傾向を示すにとどまり、それは「—的要素」か「—的性格」か、或は「—的形式」によるジャンルというのかすら分明ではない。系列並列の根拠がきわめて観念的であり、随意的ですらある。されば

こそ野田氏は

一、啓蒙教訓的なもの　二、娯楽的なもの　三、実用本位のもの

の三系列に立って、それぞれの内容を更に数種に分類して、より明確さを期しているものの如くである。

処が、中村幸彦氏は論述の目的は違うが、特に浮世草子との比較において、

一、文脈　二、構成方法　三、物の考え方

の三点に、その相違を考え、様式論上から性格規定を目しておられる。これは浮世草子の考察には除くことの出来ないものであっても、仮名草子の位置の解明には片手落ちである。もしも様式論的方法によるなら、前代の文学との比較もなされなくてはならない筈である。私は実はここに新しい方向を発見したいと考えるのである。

注1　日本古典全書「仮名草子」野田寿雄・解説

注2　同前
注3　岩波講座・日本文学「仮名草子」潁原退蔵
注4　岩波講座・日本文学史「仮名草子」暉峻康隆
注5　「仮名草子の説話性」中村幸彦「近世小説史の研究」所載

二

作家は作品の形象化に当って、方法を選択するのに既成の様式を模倣するにしても、新しい様式を創造するにしても、その様式選択には何らかの目的意識があってのことである。名所記乃至は紀行文学的様式をとるからと云って、それを名所記であるとも、紀行文学であるとも決定し難い。浄瑠璃の道行文を名所記であると云う人は誰も居ない筈である。

『竹斎』という仮名草子の作品をとり上げて見よう。これは従来、名所記として「実用的なもの」、或は近世社会の上昇的意識によって作られたものと考えられ、その文芸的な要素をその滑稽な表現形式の上に認めても、それは決して芸術的精神によって形象化されたものではないとする考え方に、(注1)大きく支配されていたようである。いうまでもなく、下巻(注2)の大部を占めている東海道下りの紀行文は、名所記的要素を否定できない処であるが、それは全巻の四分の一程度に止まることを思うと、そう断定するのは躊躇されるのである。私は『竹斎』を名所記ということによって、実用的な作品の系列に属せしめることは出来ないと考えている。

今その構成を考えて見ると、この作品は、四つの部分から形づくられている。つまり東下りを決意した竹斎の京参りを最初として、京から名古屋までの道行文、名古屋での珍療治の小咄群、そして名古屋から江戸への海道下り

の四つの部分である。これを更に細く見ると例えば、京参りは、名所記のための名所めぐりではなく、北野天神境内における、いわば風俗批評ともいうべき作者の辛棘な発言を盛り込むべき場の設定のための前提と見るべきであろう。先ず三条の大橋、祇園林から清水寺、鳥辺野、豊国神社、方広寺の大仏、三十三間堂、誓願寺、和泉式部の跡、蛸薬師と至って、更に北野天神の描写に移るのである。この北野天神に向うに際し、「さてそれより引き返し」といっているのは、地理的には少しおかしいが、これは京町衆の遊行地としての北野を出すための転じ方ともいえようか。三条の大橋にしても豊国神社、方広寺、誓願寺、そして北野天神とその主要な箇所はすべて秀吉や秀頼など、豊臣時代に建てたり再建している点、新しい名所地としての役割は十分に考えられて居るわけで、その点名所記としての意図は否定できない。

処が、清水寺において

其の身御一体分身にましませば、取り分け王難の苦しみを守らせ給ふと承る。或遭王難苦、臨刑欲寿終、念彼観音力、刀尋段々壊

と秘文によって祈っている点、この祈りはどういう意志に出たものか一寸うなずけない。又、寛永製版本には大仏殿において

ゆゆしげに顔をば見せて秀頼の役にも立たぬ大ほとけかな

の狂歌を作っているが、これは古活字本にはないものである。すなわち寛永版で何故これを加えたか、気になるところである。その名所々々といい、祈りといい、豊臣時代への懐古の筆が多いように思われ、そのカモフラジュがこの狂歌ではないかとも考えられる節が見られるのである。しかも名所々々の紹介が行われていない点からしても、単なる名所記としてしまうわけにも行かないのではないだろうか。

北野天神においては、連歌の宗匠の口を借りて低俗な連歌衆に教誡し、若侍たちの下手な蹴鞠を嘲罵し、三味線・胡弓・囃子、或は双六博奕などに興ずるものを描き、これに対し幔幕の内で聞香を楽しむ人々を点出し、これらを竹斎は狂歌で皮肉っている。次に角力などをやっている者たちを描き、つづいて、古活字本八丁程に亘って、内裏女蔵衆と上人の滑稽仕立ての成仏問答が展開される。もっともらしい談義問答の末に、破戒僧の実体が暴露される。そして竹斎は

洗濯はひだらひにてや洗ふらん説くのりまでも生臭きかな

と痛烈な一首を作っている。

この破戒僧への諷刺は、既に中世小説の『ささやき竹』や、『雑談集』『沙石集』などの説話文学を始めとして、『醒酔笑』『きのふはけふの物語』などの小咄などにおける一つの話題としてすでに定着しているものの如きものである。例えば『きのふはけふの物語』に見える次の一話などは、正にこの竹斎に共通した内容といえよう。

或る女房、若き男にはなれ、嘆きのあまりに、寺へ参り「最後におほせられしは、まこと香花もいらぬぞ、わらはが前を手向けとのたまひしものを」とて、まへをひらきて「なむいふれい、しゆり生死、頓証菩提、是をよくよく受け給へ」と、影向発願の鉦をうちならす。長老、是を物かげより御覧じて、「有難き御心ざしにて候、こなたに御入り候へ」とて、眼蔵へ引き入れ給ふ。「こは何事ぞ」といへば、「仏の御あとは出家の懐中、せんさくなし」と申されければ、是非に及ばす。暫くして出でざまに、長老の申さるるは「御遺言にまかせられ、毎月御参詣候へ」と申されければ、女房聞て、「御とき非時は、申におよばず、御布施にもいまのや」

(下巻・四十八段)

こうした好色僧、生臭物を食う僧などは、こうした咄本の中でも、一つの型となっているが、この『竹斎』のこの

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com